

# 高市皇子(たけちのみこ)と山吹の花

荻谷 俊介

山吹は八重より一重がいい。4月下旬、前夜の雨が上がり青空が広がった。新緑の萌木に命の連なりを覚えて、誘われるように山に入った。

丹沢の小流れの崖にしなだれている山吹の黄色は際立って鮮やかだ。そういえば万葉集にこんな歌がある。

《山振の 立ち儀いたる山清水 酌みに行かめど 道の知らなく》

《やまぶきの たちよそいたるいわしみず くみにいかめど みちのしらなく》

大意：黄色い山吹の花が周りに立ち茂っている山の清水を汲みに行こうと思うが、道が判らないことである。

高市皇子の歌だ。高市の歌は十市皇女(とおちのひめみこ)の死(678年)を悼んだ3首連作の挽歌が巻2にあるだけだ。山吹の歌はその最後を飾っている。高市皇子は、おそらく十市皇女に想いを寄せていたに違いない。万葉集中の歌数の少なさからか、高市の歌人としての評価は低い。しかし私はこの歌が好きだ。十市皇女は、一重の山吹の花のように可憐な女性だったのだろうか。高市は山吹の花に十市皇女の姿を思い重ね、山吹の黄色と山清水に「黄泉国(よみのくに=死者の国)」を匂わせ、今は亡き十市皇女に会いたいのだが黄泉国に行く道が解らないと、嘆き哀しんでいるのだ。この歌に高市皇子の人柄と人間性が滲み出ている。

高市皇子は、天武天皇の10人の皇子のうち最年長で、672年の壬申の乱では19歳にして全軍事権を授けられ、天武軍を勝利に導き天武政権樹立に大きな功績を残している。それほどまでに信頼された最年長の皇子でありながら、母の尼子娘(あまこのいらつめ)が胸形君徳善(むなかたのきみとくぜん)の娘で出自身分が低く、後の持統天皇を母とする草壁皇子(くさかべのみこ)、天智天皇の皇女の大田皇女(おおたのひめみこ)を母とする大津皇子(おおつのみこ)に次ぐ地位でしかなかった。

しかし、謀叛の罪で刑死した大津皇子(686年)。28歳で死去した皇太子草壁皇子(689年)の後を受けて、持統天皇より「太政大臣」に任ぜられている。後皇子尊(のちのみこのみこと)と称せられたのはそのような政情からであろうが立太子した確証はない。だが、人望厚く指導力に長けた皇子だったことは充分うかがえる。歌聖の柿本人麻呂が高市皇子の死(698年・43歳)の時、殯宮で万葉集中最長の挽歌を作っていることがそれを物語っている。

『粗であり野だが卑ではない』。山吹の歌の優れた文芸性と、武人・貴人としての生涯にそんな高市皇子像が浮かぶ。